報 告

地域との連携によるアクティブ・ラーニング実践
―国際理解学習会「Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU 2022」をてがかりに―

Active learning practice in collaboration with local communities: International Understanding Study Group "Enjoy!! The World You Don't Know with YPU 2022"

金恵媛* 岩崎姫佳**金光愛莉**神田彩乃**住川愛怜菜**寺沢茉莉**山田新梨**久村紀恵***井竿富雄*[i]
KIM Hyeweon, IWASAKI Himeka, KANEMITSU Airi, KANDA Ayano, SUMIKAWA Erena, TERASAWA Matsuri, YAMADA Niina, KUMURA Toshie and IZAO Tomio

＜要旨＞

本稿では、大学における質の高い学習教育を目指す取組として、山口県立大学生と地域住民が協力して行った国際理解学習会活動をアクティブ・ラーニングの観点から考察した。不測の事態にも対応できる力を育成する方法としてアクティブ・ラーニングが注目されている。学習会の運営は学生が行った。ゼミ活動の一環として取組んだことから、チームワークやスケジュール管理を比較的容易にできた。毎回の活動後のふり返りでは、チーム内の役割分担、連絡や情報共有をめぐる協力関係について課題や改善方針が挙げられた。世代間（学生と地域住民）関係の面では、対話的な学びの実践が注目された。イベント経験知やデジタルスキルの習熟度の差異を認め合う過程を通して、より協調性が高まったと認められる。

This article explored the international understanding activities of Yamaguchi Prefectural University's students and citizens of Yamaguchi city. The author examined this activity of providing quality education through active learning perspective, which is attracting attention as a method for improving the capacity respond to unexpected incidents. These activities were planned and performed by Yamaguchi Prefectural University's students. As this activity was executed through a seminar, it was convenient to schedule them and create the necessary teams.

After every activity, improvement points were developed for each team members, focusing on the division of roles within the teams, their communication, and their cooperation in information sharing. Interactive learning practices were noticed as an aspect of the relationship between students and regional residents. The students and the residents, collaborated by sharing their experiences and proficiency in digital skills, which increased their cooperation through active learning.

＜キーワード＞

アクティブ・ラーニング、ゼミ活動、学習交流会、連携、チームワーク

Active learning, Seminar activities, Learning Exchange, Collaboration, Teamwork

１．ゼミと地域の連携によるアクティブ・ラーニング

様々な文脈でDX（デジタル・トランスフォーメーションの略称、以下はDXと表記する）の文字を目にするこの頃である[1]。まるで流行語のようだが、社会の変化とニーズを象徴する言葉である。事実、コロナ禍の遠隔システムへの移行・普及が進む中、多くの人はすでにDXを経験している。例えばオンラインでの会議や授業が可能になり通勤や通学における物理的な距離の影響はほとんど考慮しなくてもよくなった。本学でも遠距離から大学院の講義を受けている人が増えている。より身近な日常生活の場面で考えてみると、

[i] *山口県立大学国際文化学部教員　**山口県立大学国際文化学部学生　***やまぐち韓国研究会員
本稿は、第１章（金）、第２章（久村）、第３章（岩崎・金光・神田・住川・寺沢・山田）、第４章（井竿）が分担執筆した。

タクシーやフードデリバリーなどのアプリを使ったサービスの普及で待ち時間が圧倒的に減り、便利になった。その一方、ソーシャルメディアアプリの利用が困難な人には不便な世の中であり、状況変化に対応できるか否か、というデジタルデバイドの問題が顕在化している。教育現場でDXの推進を担う人材の育成が喫緊の課題となっている所以である。山口県立大学でもDX分野を強化しデジタル人材の育成を行う方向へ組織を改編することが公表された[2]。

DX同様現代を象徴するもう一つのキーワードとしては「人生100年時代」が挙げられよう。60歳で定年を迎えても、あと40年もの人生がある。義務感によって勉強や仕事に取り組むということから少し解放され、自主性が発揮できるライフステージである。新しいことを学ばず社会の変化から目を背けて孤立して過去に生きるというだけでは、残された時間は埋まらない。また、コロナ禍で体験したように、予測しにくい変化がいつ、どのような形で起こるかわからない。変化を恐れないで向き合う、そのためには能動的に学び続けるほか選択肢はないように思われる。しかし、学生時代に受験向けの受動的な教育を受ける習慣がある人が自主的に学び、それを生涯続ける習慣づくりはそう簡単な話ではないと考える。さらに、学校や職場などの集団や組織からのサポートが受けられないなか、社会のダイナミックな変化に気づき、適切に対応するとは並大抵なことではない。だからこそ教育現場において「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた」アクティブ・ラーニングが強調されているのである[3]。コロナ禍のような「従来の経験値では予測が難しくなる時代」や長期化する高齢期にも自主的に、すなわちアクティブに生き抜く力の育成である。

このような能動的な学習能力の育成を目指して、韓国社会論研究室（以下は金ゼミと表記する）ではゼミ生と地域住民の学習交流活動を展開してきた[4]。具体的には、「やまぐち韓国研究会」（以下は研究会と表記する）とのコラボ学習交流会である。金ゼミと研究会の協働は2006年度以来である。ゼミ生がゲスト・スピーカーとなって留学体験を紹介したり、学科で行われる卒業論文・報告の中間・最終発表会の前に研究会で発表リハーサルをしたり、研究会を巻き込んだ国内外のスタディーツアーも複数回実施するなど学び共同体としての交流を続けてきた。2008年度からはゼミ生も研究会のメンバー（「学生会員」）となり、毎月の定例学習会に参加し多様な交流活動を行っている。毎月研究会の世話人の活動をして定期的に発表も行う学生会員の役割はあくまでも課外の活動であり、ゼミ生には負担が重いと考えるかもしれない。しかしながら、共通の問題関心を中心に世代間・文化間で意見交換ができる機会であり、いわば社会人基礎力を育成する機会として貴重であることは間違いないと考える。実際、研究会活動のおかげで就職の面接や職場での対人関係であまりしなかったという報告や、学生会員ではなく一般会員として研究会に継続参加をする卒業生も少なくない。

ところが2020年、新型コロナウイルスの感染拡大によって大学の授業が遠隔方式に切り替わるとともに学生の課外活動も自粛に追い込まれた。高齢の会員が多いことから、対面で開催してきた研究会も当面の間休会を余儀なくされた。結果的に、それまでのゼミ生が経験してきた世代間・文化間の直接交流の機会も遮断されることになった。2020年度後期には遠隔方式による研究会をなんとか再開できたものの、学生の参加は実現しなかった。

コロナ禍の閉塞的な状況をなんとか打破し、以前のような研究会形式へとある程度復帰できるようになったのは2021年度になってからである。研究会が申請した「Enjoy !! あなたの知らない世界 with YPU」（以下は本活動と表記する）が山口県国際交流協会の助成事業として採択されたのである[5]。2021年度は韓国、台湾、スペイン、そしてロシアからの講師を招き、各国の特徴的な社会文化について紹介してもらう講座を運営した。主催にあたって特に力を入れた特徴的な試みとしては、講師に、外国人住民の立場から山口や日本で生活するなかで感じたことについて語ってもらったことが挙げられる。ねらいは、参加者に外国人住民と等距離から日本文化を捉える体験をしてもらうことにあった。そのことを通して、日本の文化を主軸にして外国人住民に日本の地域コミュニティに適応することを求める一方的な文化理解を止揚し、住民同士の双方向の文化理解を土台とする共生関係作りを目指した。

続く2022年度は、韓国と日本の文化について集中的に取りあげることになった。前年度の経験から、学生

の役割を強化した。３年次に設定されている専門演習の実践研究として本活動を位置づけるとともに、学生が講師を務める回も設けた。授業の一環であることから、課外活動の位置づけであった前年度に比べ学生にはより能動的な関わり方が求められ、事前事後の打ち合わせのために集まることも容易になった。スケジュール管理や情報共有、役割分担についてもコミュニケーションがとりやすくなり、結果的によいチームワークができたと考える。協調的な学びという観点からは、卒業生や研究会メンバーが講師または運営メンバーとして参加して、ゼミ活動でありながら他のゼミの教員からの参加や指導が得ることもできた。ゼミの枠を超えての学習・教育のチームワークが実現できたと考える。毎回の活動後のアンケートをみると参加者の満足度が高く、学生のふり返りからも能動的で協調的な学びへと進展している状況がうかがえる（詳細は３章へ）。

次章以降では、金ゼミ３年生が中心となって行った実践研究「Enjoy !! あなたの知らない世界 with YPU 2022」の活動概要及び学びについて取りあげる。学生と研究会メンバー、そして教員の参加者がそれぞれの立場から本活動について振り返る。まず、第２章では「研究会」の立場からのふり返りである。山口県国際交流協会の助成事業や研究会と金ゼミのコラボ学習会の歩みについて報告する。第３章は学生の活動報告で、アクティブ・ラーニングの「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つのカテゴリーを軸に本活動を振り返る。最後の第４章は教員の参加者からの報告で、本学で実施されているアクティブ・ラーニングやその他の地域実習を視野に入れながら、本活動への気づきや今後の課題について述べる。これを通して、ゼミと地域が連携して行うアクティブ・ラーニングの効果や意味を考えるとともに、別の組み合わせや学習テーマによる新たな実践研究の可能性について考えたい。

2. やまぐち韓国研究会と韓国社会論研究室ゼミ生の協働

2-1　やまぐち韓国研究会とその活動

本節ではまず、活動の場となった「やまぐち韓国研究会」について概観し、続けて活動内容について述べることとしたい。2006年４月、山口県立大学（以下は本学と表記する）の地域向け講座「やまぐち桜の森カレッジ」の国際・文化コースの講師である国際文化学部金恵媛先生と、15時間のゼミ形式の講座を修了した地域住民が、韓国の歴史や文化などについて学ぶ自主学習グループ「桜とムグンファの会」を発足した。２年後、本学韓国社会論研究室ゼミ生（以下はゼミ生と表記する）や卒業生も加わり「やまぐち韓国研究会（以下は研究会と表記する）」と改称し、大学生から80代まで幅広い年代による異文化・異世代交流活動を実施してきた。研究会の活動は、本学Yuccaを拠点として行い、８月と１月を除く毎月１回の定例会（学習会）、２年に１回の韓国スタディーツアー、県民に公開しての国際交流員招聘講座、「関門トンネル殉職者の碑」をはじめとする下関でのフィールドワーク、長門市仙崎の引揚の足跡を辿るフィールドワーク、韓国料理の試食会など多岐にわたるものであった。2019年度は山口市の助成を得て韓国公州市民との交流事業を実施した。2020年２月以降、新型コロナウイルス拡大により、活動中止を余儀なくされ、ゼミ生も参加ができない状態となった。2020年７月に地域住民、卒業生のみでZoomによる定例会の開催を試行した。しかし、会員の三分の二はインターネットの環境が整っていないことから、宮野地域交流センターを借りてZoomと対面を併用したハイブリッドで定例会を実施することとした。2021年度、対コロナウイルス感染防止対策を遵守したうえでの学生の課外活動やYuccaの利用が徐々に許可されるようになり、再び学生との協働が可能になった。そこで山口県国際交流協会（以下は国際交流協会と表記する）に助成金の交付を申請して始めた事業が、以下に述べる「Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU」である。

2-2　Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU

山口県には、近年技能実習生や留学生などの外国人居住者が増加している。しかしコロナ禍にあって日本人の学生同士でもコミュニケーションがとりにくい状況であり、外国人と交流する機会は稀有である。2021年度は、多文化共生社会構築のため、外国人居住者と県民が、互いを理解し、尊重しあうことが、喫緊の課題であることから国際交流協会の助成を受けて「複言語・複文化講座」を企画した。参加者が、県在住の外国人からそれぞれの国の言語や文化、日本との違いを学び、相手を理解し、講師や他の参加者と交流できる

講座を目指した。企画当初、講師として外国人技能実習生の方にも依頼したいと希望していたが、実現できなかった。概要は表2-1のとおりである。

表2-1　Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU（2021年度複言語・複文化講座）一覧

回	開催日	会場	講師（敬称略）	参加者数（名）※
1	5月9日	本学 Yucca	マリア・ルビオ（山口市国際交流員・スペイン）	対面13、Zoom 17
2	7月18日	山口ふるさと 伝承センター	李（リ） 恵麗（フェイリー）（技能実習生の通訳・台湾）	対面18、Zoom 12
3	10月24日	山口ふるさと 伝承センター	李（イ） 承和（スンファ）（山口県国際交流員・韓国）	対面21、Zoom 10
4	12月12日	本学 Yucca	バレンティーナ・ボトホエバ （山口県国際交流員・ロシア）	対面21、Zoom 11
5	2022年 2月20日	ふりかえり	マリア・ルビオ（山口市国際交流員） 李 恵麗（技能実習生の通訳） 井竿 富雄（教員） 金 恵媛（教員） 田中、谷口、淵崎、星、丸山、吉村（以上金ゼミ3年） 久村（研究会）	Zoomのみ14 ※コロナウイルスオミクロン株により県全域まん延防止等重点措置・学生部活度禁止による

毎回、簡単な言語学習とグループ協議をプログラムに組み込むことにより参加者・関係者の複言語・複文化理解を目指した。

ゼミ生、研究会及び講師との打ち合わせや連絡は、Zoom・LINEで行った。研究会が広報、会場での対面参加者対応、記録を担当し、ゼミ生は講師との講座内容についての事前協議、司会及び当日のZoom操作を担当した。上記の全５回の講座を終え、次年度に行ったのが以下の「Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU 2022」である。

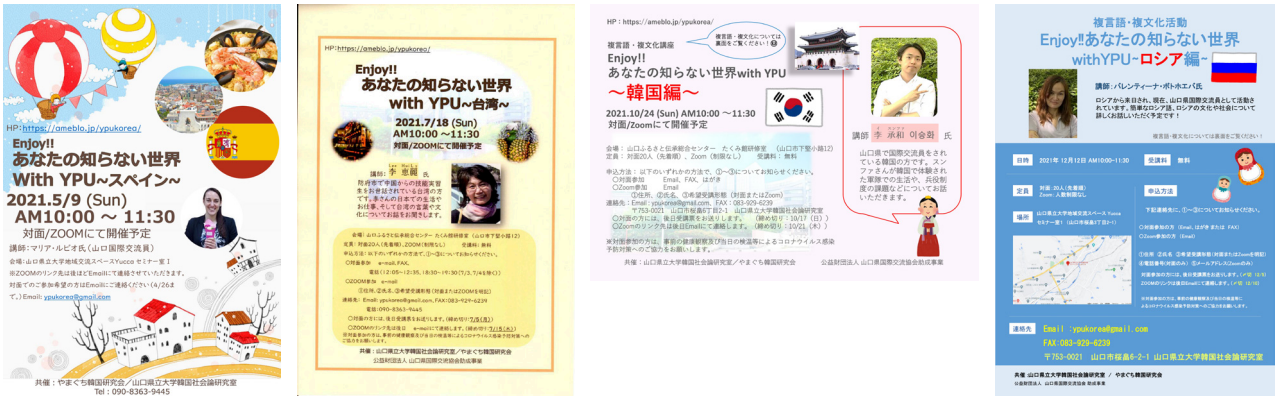

図2-1　2021年度の講座で用いたチラシ

2-3　Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU 2022

毎年４月から研究会と活動を共にするのは、韓国社会論研究室の３年生である。一方、国際交流協会の助成金申請は、前年度の３月末が締切である。新ゼミ生の興味・関心を得ることができるかどうか不明ではあったが、より充実した講座の実現が可能になることから、事業内容に悩みながら２年目の申請をした。「企画は研究会が行い、運営はゼミ生が行う」2022年の協働事業はスタートした。５月末に採択が決まり、第１回目の講座終了後、金先生とゼミ生と内容を協議し、国際交流協会に変更届を提出した。講座４回のうち、前半の２回は、韓国映画・韓国ドラマやKPOPから韓国の文化や社会を学ぶ講座を行った。後半の講座

では、韓国を好きな日本人や、日本に興味を持った外国人が、大学や社会でどのような学びや活動をしているかを知り、参加者が自らの体験なども語るミニワークショップを行った。県民と外国人や本学学生との交流の場つくり、多文化共生・異文化理解を目的として講座を開催した。以下が今年度の概要である。

表2-2　2022年度の活動内容一覧

回	開催日	会場	講師　（敬称略）	タイトル	参加者数（名）
1	6月19日（日） 10：00～11：30	Yucca ｾﾐﾅｰ室１	ソン・ハンビッ（山口県国際交流員）	韓国ドラマ・韓国映画で見る現代韓国文化	対面 20 Zoom 18
2	10月23日（日） 13：30～15：00	C546	岩崎、金光、神田、住川、寺沢、山田 （以上、金ゼミ３年） 井竿 富雄（教員） 金 恵媛（教員）	KPOPからみる 韓国社会	対面 20 Zoom 13
3	11月19日（土） 13：30～15：00	C546	藤原 義嗣（梅光学院大学准教授）	韓国に恋した40年 ～一片丹心 ミンドゥルレ～	対面 28 Zoom 7
4	12月4日（日） 13：30～15：00	C546	ソン・ハンビッ（山口県国際交流員） 石 昌豊（大学院生） 六車 陽子（金ゼミ・卒業生） 山口・久村（やまぐち韓国研究会） 井竿 富雄（教員）	「好きをかたちにする」 語り場	対面 27 Zoom 4

2-4　広報について

図2-2　2022年度のチラシ一覧

2022年度において、チラシはゼミ生が作成し、ネット印刷の入稿と納品時の受取りを研究会が行った。図２-２は、ゼミ生によるチラシの一覧である。第１回目、ゼミ生は学内にチラシを配布し、研究会は前年度受講者に郵送するとともに、山口県立図書館、宮野地域交流センター、国際交流協会に設置を依頼した。しかし第２回目からはチラシ送付も基本的にメールで学生が行うことになった。研究会では施設設置依頼と会員へのLINEでの案内のみを行う。チラシに関して今年度、特筆すべきこととしては、大学のホームページと電子掲示板への掲載である。このことにより、LINEでホームページのチラ

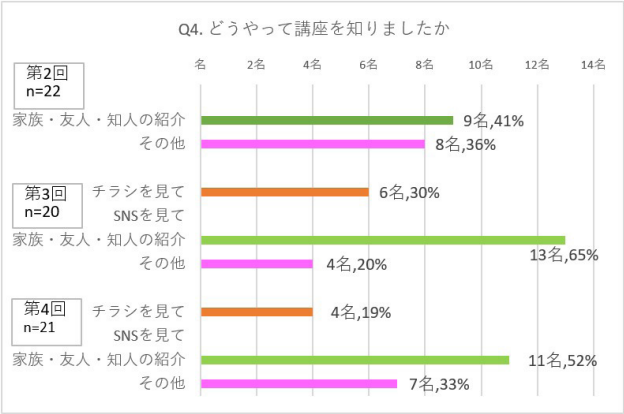

図2-3　アンケート結果

シ掲載のURLを送付できるようになった。表２-３は、第２～４回のアンケート結果より、どのように講座を知ったかを、グラフにしたものである。いずれも家族・友人・知人の紹介が最多であり、個人への直接の声掛けにより参加した人が多いことがわかる。しかし、一方で第３回・第４回では一定数以上の人がチラシを見てという理由を挙げている。広報においてチラシの果たす役割が大きいといえる。また、第３回・第４回講座については、サンデー山口に広告を掲載したが、こちらは成果を得ることができなかった。以上、研究会が行った広報についてという角度から記述したが、次にゼミ生と協働した２年間の活動についてふりかえる。

2-5　2年間の講座をふりかえって

「Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU（以下は本活動と表記する）」は、ゼミ生と研究会の共催による講座である。2008年より研究会の構成員の一部であったゼミ生が、コロナウイルス感染拡大により一旦は研究会と離れたが、本活動において、再度結集して一つの事業を成し遂げた。コロナ禍にあって会場にゼミ生が来ることができなくても、Zoomというツールが講座を可能にした。

2021年度と今年度の協働における一番大きな違いは、研究会が何度かのゼミでの振り返りや、教室でのZoomテストに対面で加わり、その過程で彼女たちと情報や問題点を共有してきたことである。当初、ゼミ生にとっては授業の一環であり、ゼミ生が考えて運営していることに対して、依頼されたこと以外は傍観したほうがよい、と思い込んでいた。しかし、その考えは間違っていることに気づき、ゼミ生の未経験分野でのアドバイスと補足をすることにした。今までのイベント経験を活かして会場までの地図を作成し、ゼミ生にポイントを説明しながら案内看板の設置などの作業を共にした。ゼミ生から教えられたことも多い。デジタルの急速な進歩に取り残されがちな研究会は、Google ドライブへのログインや、データのアップロードの方法がわからず、ゼミ生に助けてもらった。こうして、webでの情報共有と、ゼミ生のふりかえりに同席し回を重ねることにより、一緒に問題解決の方法を探せるようになった。

また、県民が参加した本講座では、地域住民と学生、外国人と地域住民、など様々な交流活動が生まれた。特に第４回の語り場では、学生、地域住民、外国人が「好きがかたちになった瞬間」というテーマで話し合うことができた。すべての講座を奥さんに連れられて参加されたという男性は、「子供のころ、近所の韓国人が好きではなかった。しかし、毎回参加してずっと話をきいているうちに、気持ちがかわってきた。相手を知ることが大事だと思った。」との感想を話された。互いに今まで知らなかった世界と出会い、韓国や韓国人に対して理解を深めることができれば幸いである。本講座の開催が、異世代交流・異文化交流そして地域住民の多文化共生の一助となることを期待する。

図2-4　案内の看板
矢印はゼミ生の手書き

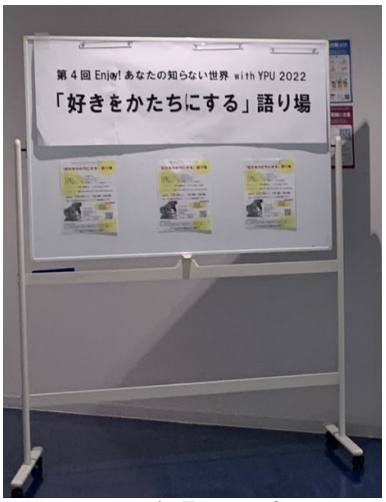

図2-5　会場入口の掲示
研究会がA4用紙で作成したものをゼミ生が拡大コピーし、張り合わせた横断幕とチラシ

３．「Enjoy !! あなたの知らない世界 with YPU 2022」活動概要及び振り返り

ここまで、活動の概要について触れてきた。これを、活動を企画し、実行してきた学生の立場から見るとどのような点で気づきや新たな学びがあったのか。本節ではこの観点から考えてみたい。まずは、全４回講座についての振り返りの総まとめを表として掲げる。各回の詳細についてはその後に述べていくことにしたい。

表3-1　全４回講座を通した振り返り

	本活動（第1～４回）を気づきや出来るようになったこと
主体的な学び：能動的に取り組めたこと	・自分に与えられた仕事だけではなく、周りを見て、自ら積極的に仕事に取り掛かることができた。（具体例：質疑応答の時間に質問者にマイクを持っていくなど決められた仕事ではなくても自分が動くべきだと判断して行動できた。） ・講座受講者の期待に応えるために自分たちで様々なアイディアを出し、より良い講座にすることができた。（具体例：第２回講座では受講者に興味を持ってもらうためにゼミ生が各自で好きなアーティストのペンライトを持参するというアイディアを出した。） ・講座受講者の不安が何かを自分たちで推測し、少しでもその不安を取り除けるように受講者に配慮した講座を開くことができた。（具体例：会場までの案内をしたり、グループワークでゼミ生が司会をして話を進めたりと受講者が不安を抱かないよう工夫することができた。）
チームだからできたこと	・それぞれの仕事の配分を考え、自分の仕事が少ないと感じた時や、すでに終わっている時には、自ら仕事を引き受けたり、他の人の仕事を手伝うことができた。（具体例：事前準備をする上で看板の作成や準備物の用意など新しく出た仕事を進んで引き受けた。） ・はじめは連絡不足による仕事量の偏りや作業の重複やミスがあったが、お互いの進捗状況を報告しあい、協力するようになってからは、作業を効率よく進められるようになった。 （具体例：Googleドライブで情報を共有できるようにしたことも、学生同士はもちろんのこと、先生や研究会とのチームワークでも有効であった。）
他の事にも応用できそうな深い学び	・予想外の出来事やトラブルが発生した際には臨機応変に積極的に動くということ。(具体例：申し込みをされていなかった方や当日欠席の方にも焦らず対応することができた。） ・イベントなどの運営をする際は念入りな打ち合わせと事前準備、振り返りが非常に大事であるということ。（具体例：打ち合わせを何度も行ったことで新たな改善点を見つけたり、Zoomを使った遠隔操作など不安な作業を減らしていくことができた。） ・リハーサルは一度ではなく複数回行い、課題を少しずつ減らすべきだということ。 ・自分たちだけで企画するのではなく、様々な人の意見を取り入れていくことが重要であるということ。（具体例：ゼミ生だけで話し合うのではなく、先生や研究会からの意見も伺ったことで、立場や世代が違う人の視点からの考えも取り入れることができた。） ・プレゼンテーションを行う際は、話し手と聞き手が双方的にコミュニケーションを取れるものを作る必要があるということ。（具体例：聞き手に質問を投げかけたり、クイズを出したりして一方的な発表にならないように心がけた。） ・チームで動く際は、こまめに連絡を取り合い、お互いの状況に配慮・相談しながら作業をするべきだということ。（具体例：一見関係ないように思える情報でも参加者の申し込み状況やそれぞれの仕事の進捗状況を共有したことで作業を円滑に進めることができた。）

3-1　第１回講座「韓国ドラマ・韓国映画でみる現代韓国文化」

第１回講座は、山口県国際交流員のソン・ハンビッさんを講師として招き、Yuccaで開催した。

3-1-1　事前準備の概要と振り返り：失敗から学ぶ連携の大切さと地域の方への配慮

・広報物の作成：まず、初めの作業として、講座のチラシ作成を行なった。必要な情報のみならず、助成事業であることを表記するなど、様々な点に注意し、修正を繰り返しながら完成させた。ただ、講師の写真を使う際、きちんと許可を取るべきだった。

・受講者関連の資料作成：チラシの配布が始まってからは、申し込みのメール対応や参加者リスト･シナリオ･健康記録表･アンケートの作成を行った。メール対応については、返信をゼミ生が行い、やまぐち韓国研究会の担当者(以下では研究会と表記する)が受講票の郵送を行なった。そして、同時に参加者リストを作成していたが、受講票郵送のため、逐一、研究会にファイルを送っており、最終版が分からなくなってしまった。そこで、反省会の際、研究会に報告をしながら進めるのは、混乱が生じてしまうとのことで、今後は、

図3-1　第1回講座チラシ

受講票の郵送を取りやめ、受付の全てをメールで行い、ゼミ生のみで行う方が良いという意見が出た。シナリオや健康診断表については、修正を頼り切ってしまったり、情報共有不足で作業が重なったりしてしまった。アンケートについては、Googleフォームのみで行ったため、集計はスムーズに行えたが、スマホに不慣れな方は答えにくいようだった。次回以降は紙媒体でのアンケート実施が必要であり、地域の方のことを配慮することに決めた。

3-1-2　講座当日の運営と振り返り：運営の難しさと事前準備の大切さ

・会場・運営：講座当日の作業としては、受付や看板の設置、席への誘導、講座の司会、Zoomの運営を行なった。受付については、消毒・検温・出欠確認がスムーズに行えていなかったので、順序良く、効率よく行えるように流れを考えておくべきであった。席への誘導では、用意していた座席表と実際の座席番号が異なっており、参加者を混乱させてしまった。受付や席の誘導に関しては、念入りな確認をしておく必要があった。講座の司会については、時間調整が上手く行えず、講座終了予定時刻を過ぎてしまった。また、マイクが二つしかなかったこともあり、質疑応答時に、質問がなかった時の声掛けが行えず、締まりのない時間になってしまった。そこで、質問はゼミ生ができるように準備しておき、タイムキーパーを設けるべきであったという反省が挙がった。Zoomの運営については、講座内で映像を流した際に、Zoomと会場とで音量が異なっていた。Zoomのマイクテストなど事前に確認はしていたものの、動画共有に関しては確認ができていなかったため、そういった問題が起きてしまった。今後は、様々な問題を予測したZoomテストなどの十分な事前確認が必要である。

図3-2　第1回講座の様子及び集合写真

3-1-3　講座終了後の振り返り：初めての企画・運営から学んだこと

第１回講座を通して、様々な反省点が見つかった。具体的には、積極的な事前準備への参加、メンバーとのこまめな連絡と協力が不足していた。初めてのことだらけで、指示通りに動くことしかできず、自分たちから積極的に動くことができていなかったように思う。また、メンバー同士の連絡や協力が不十分であり、仕事量の偏りや作業の重複が起きてしまった。このように、第１回講座では、反省点が多く、辛うじて講座運営できたというような状況であった。しかし、講座の企画・運営とその後の反省を通して、自分たちができたことと改善が必要なことが明確に見えたことから、次回以降の講座運営に活かすことができており、失敗を経験し、成長できたと思う。

3-2　第２回講座「KPOPからみる韓国社会」

第２回講座は、「KPOPからみる韓国社会」というテーマのもと、韓国社会論研究室のゼミ生が報告者となった。講座内容は２部で構成され、第１部は韓国アイドルの歴史やアイドルが社会に及ぼす影響について、第２部はゼミ生が好きな韓国アイドルグループの魅力について発表した。

3-2-1　事前準備の概要と振り返り：前回の反省を生かした取り組み

・広報物の作成・講座申請：チラシ作成では、重要な情報が一目で分かるように、見た時にチラシの重要な情報が見る人の目に入りやすいように工夫することを主に意識した。また、第２回講座では、チラシ担当を２人決めていた。しかし、パワーポイントを共有できないという不具合により２人同時に作業することができず、仕事量に偏りができてしまった点が反省点として挙げられた。

・受講者関連の資料作成：健康記録表作成では、健康記録表に当日の席番号を記載したことで、自分の席がどこなのか分かりやすかった。ただ、数字が小さかったためパッと見ただけで分かるように数字を大きく記載する必要があった。参加者リスト作成においては、年配の方などQRコードタイプのメール申し込みに慣れていない方が多く、メールでの申し込みができない人がいた。もう一つの問題として、メール返信の際に、Gmailからではドコモメールに返信できないことが分かった。メールの返信に伴い、返信をする人と名簿を作成する人が別々だったため、双方にズレが生じた。そのためメール返信と名簿作成は同じ人が担当するようにする必要がある。シナリオの作成は、第１回講座のシナリオを参考に、第２回講座では、セリフ付きのシナリオを作成した。前回は研究会に頼りきってしまったが、第２回講座に向けたシナリオ作成は、研究会に頼ることなくゼミ生が主体となって大枠のシナリオ作成や修正を行うことができた。

図3-3　第2回講座のチラシ

3-2-2　講座当日の運営と振り返り：主体的に企画運営を行うことで見える新たな発見

・資料：前回の反省をふまえてスライドを縮小した資料を配布した。当日の反省としては、配布資料を事前に準備しておくことが大切だと改めて実感した。第２回講座はゼミ生が報告者でもあったので、かなり忙しくギリギリな日程で準備を進めていた。配布資料の印刷が当日になってしまった。第３回講座からは事前に準備しておかなくてはならないと感じた。

・会場・運営：当日は、誘導・案内と、受付、Zoom、司会の役割に分かれ講座を進行した。まず、誘導・案内では、かなり反省点が見られた。会場案内にあたり、ゼミ生の担当が４人、看板と矢印を記載した張り紙をいくつかの場所に設置した。運営してみた結果、看板や張り紙で補うことができ、誘導・案内係の役割はあまりなく、誘導・案内係は４人もいらないという反省点が挙がった。受付では、申し込みの段階は一人だったが当日付き添いで来られた方がおり、付き添いの方の席を用意していなかったという問題があった。急な変更ではあったが臨機応変に対応し、席を作って配布資料を配布することができた。

Zoomでは、主に音声の問題が大きかった。スライド中にたくさんの動画を添付していたため、容量がかなり重くなった。動画の共有に備えて何度もリハーサルを行ったものの、動画の重さで音声が流れなくなったり、全体的に音声が聞き取りにくかったりと問題があった。また、ゼミ生が発表者であったため全体的に余裕が無く、Zoomの方への資料配布が遅れてしまったことも反省点だ。

さらに、講座終盤にアンケート記入の協力と写真撮影の呼びかけを行った。しかし、アンケート記入から写真撮影、解散の流れが悪く、Zoomの方々が退出のタイミングを失っていた。その反省を生かし第３回講座からは、先に写真撮影を行い、アンケートの記入、記入が終わり次第退出、という順番に変更することにした。その際、司会がきちんと流れの誘導を行わなくてはならない。

事後活動では、アンケートを行った。アンケートでは、第１回講座で使用したものを参考にGoogleフォームで作成した。第１回講座では、講座への満足度を１から５の数字で表していたが、数字だと曖昧で分かりづらかった。そこで、数字ではなく、満足、やや満足、やや不満、不満、などの言葉に変更した。また、満足度の理由を各項目も加えた。集計はWordで行い、回答が遅い人もいることを考慮してすぐには集計を行わなかった。

図3-4　第２回講座の様子及び集合写真

3-2-3　講座終了後の振り返り：受講者の立場に立って企画運営を考える

以上のように、第２回講座では、企画から当日の運営まで、私達ゼミ生が中心となって講座を行った。そのため、全体的に余裕が無く反省点も多かった。しかし、第１回の反省を生かしながらゼミ生同士で協力し、企画や運営を行う中で協調性や人として成長できた部分も多かったように感じる。講座の中で使用したスライドは、約半年間、ゼミ生６人が一丸となって作成に取り組んだ。お互いにそれぞれを客観視したり、ゼミを通して金先生からアドバイスをいただいたり、何度も試行錯誤を繰り返しながら作りあげた。決して容易な活動ではなかったが、発表者として相手の立場に立って考えることの大切さや仲間と協力することで得られる達成感、企画を運営する上で意識するべきことなど、一人の人間として成長することのできた貴重な経験だったように思う。

3-3　第３回講座「韓国に恋した40年～一片丹心 ミンドゥルレ～」

第３回講座は、梅光学院大学の藤原義嗣先生を招き、ご自身の実体験を中心に韓国との関りについてお話しいただいた。

3-3-1　事前準備の概要と振り返り：対応の遅れと前回担当者との引継ぎ不足

・広報物の作成・講座申請：運営において最初に行ったのはチラシ作成で、役割分担の時点では担当者が２人いた。しかし、２人で一つのチラシを作成するのは難しく、結果１人が作成したため、第４回講座のチラシ担当は１人にし、共有されたものを全員でチェックするということになった。申し込みのメール対応は、チラシを配布した時点で担当を決めていなかったため対応が少し遅れてしまった。また、夜遅くに返信してしまったり、受信から二日ほど経ってからメールが来ていることに気づき、返信が遅くなってしまうなど参加者への配慮に欠けていたという点が反省点として挙げられた。しかし、講座開催日近くになってから再度、研究会が作成した「会場案内の地図」や、「Zoom参加リンク」をメールすることが講座の再通知になって良かったという成果も挙げられた。第３回講座では、チラシを入稿した後に、記載した申込フォームのQRコードに不備を発見した。そのため、第２回講座の参加者へ第２回講座参加のお礼と共に第３回講座の予告のメールを送っていたが、訂正したチラシを再度送信することとなった。続いてシナリオ作成では、第２回の担当者からの引継ぎがうまくいっておらず、セリフが無い、講座の流れのみを記載したものを作成してしまい、その後セリフを付けたものに修正した。その他の事前の準備には、配布資料の作成と健康記録表があり、発表の大まかな流れとメモ欄を付けた資料と、前回同様の健康記録表を作成した。健康記録表は、席番号をつけていたことで受付の番号とズレが生じたため、第４回講座では健康記録表に席番号はつけないことになった。

図3-5　第3回講座のチラシ

3-3-2　講座当日の運営と振り返り：求められる臨機応変な対応

・資料・運営：会場案内では、会場まで来る道順が前回と変わり、エレベーターを出てから教室まで距離があったため、学部事務室のところで曲がる人やトイレを出てから会場の教室が分からず元来た道を戻ってきた人もいたので、誘導係を配置して良かった。受付では、メールの申し込みと参加者リスト作成の過程で対面とZoomの参加方法に確認不足があったため、対面参加だと思っていた人がZoomで参加されていたということがあった。また、遅れてくる人や当日欠席の人への対応が考えられておらず、うまく対応しきれなかった点が反省点として挙げられた。続いて当日の運営の司会では、講座前の藤原先生との打ち合わせで、「質疑応答に30分も必要ないかもしれない」ということで、発表時間を延ばした。質疑応答の時間が予定より短かったこと、質問者の質問が長かったことから、質問が出ない空白の時間は少なかった。しかし、時間が迫った時に、講演時間と質問者からの質問タイムの調整にうまく声をかけられなかった点が反省点として挙げられた。Zoom担当の反省点は、PCを接続するまでのリハーサルは行ったが、共

有までできていなかったため、共有が反映されない事態が起きたことである。PowerPointの共有ではなくPC画面全体の共有に切り替えることで解決した。また、前回の反省から、今回は大学から集音器を借り、Wi-FiはLANケーブルを使用したことで、音声や通信環境の問題は改善された。先生からお借りした広角カメラの利用により、Zoom参加者にも会場の臨場感を伝えることができた。講座後のアンケート記入については、先に集合写真の撮影をしたため、撮影後そのまま帰られる人が数名おられ、次回は先にアンケートの記入をお願いすることになった。また、前回の反省からGoogleフォームのアンケートと紙媒体でのアンケートを作成したことで、回答率が前回より上がり、具体的な意見をいただけた。

図3-6　第３回講座の様子

3-3-3　講座終了後の振り返り：チーム活動で必要な情報共有

第３回講座は、事前準備の期間が第２回講座の発表準備と同時進行だったため遅れやミスが多々あった。しかし、前２回の講座に比べ、学生同士の進捗状況の共有や、研究会との意思疎通も図れるようになったと感じる。情報の共有や状況の報告をこまめに行うことで、作業を効率化させることができ、ミスも減らすことができるということを学んだ。また、講座後のアンケートでは、参加者から「お話がとても面白かった」「一緒に考えながら聞けた」「韓国人の思いやりを知ることができた」などの感想をいただき、高い満足度を得られた結果となった。

3-4　第４回講座「『好きをかたちにする』語り場」

第４回講座は、「好きをかたちにする」語り場というテーマのもと、講座のパネリストとして山口県国際交流員のソン・ハンビッさん、山口県立大学大学院国際文化学研究科２年生の石昌豊さん、山口県立大学国際文化学科卒業生の六車陽子さん、やまぐち韓国研究会から山口久美子さんと久村紀恵さんからお話をいただき、国際文化学部の井竿富雄先生にコメントをいただいた。参加者も含め自分の「好き」について語り合うというワークショップ形式の講座を行った。

図3-7　第4回講座のチラシ

3-4-1　事前準備の概要と振り返り：スムーズな運営に必要なのは用意周到さ

・広報物の作成・講座申請：この講座の事前準備としてまずチラシ作成を行った。前回の反省を活かし、作成は一人が行い完成したものを全員で確認することにした。今までのチラシ作成を参考にして文字のサイズや量、配色により伝えたい必要な情報を分かりやすく作ることができた。高齢の方はQRコードを読み込み、メール作成をすることが難しいという反省から、QRコードと共に、参加申し込み必須情報と宛先を載せておくことで、スムーズに参加希望メールを送りたい人とQRコードがうまく使えない人の両方に配慮したチラシを作成することができた。次に申し込みメールの対応である。前回の反省から、当日講座を欠席する人や遅刻する人へ連絡をしてほしい旨を申し込みの返信の内容に含む予定だったが、その内容も連絡先も参加者に伝え忘れてしまった。ここから前回のメール担当との情報伝達や共有ができていなかったことが反省として挙げられる。ただ、今までの講座運営の経験を通して、メール対応はスムーズにできるようになった。次に案内についてである。前回参加者の方が迷ったところを考慮し、トイレ前や事務室前などの迷いやすいところにわかりやすく案内を掲示することができた。配布資料においては、メモ用紙に講座の流れを載せたことで参加者も全体の流れを見通せられるようになり、講座運営をスムーズに行うことに助力できたのではないかと思う。今までの講座を通して配布資料として何が必要か分かっていたため余裕を持って漏れ

なく用意できた。シナリオについては、講座の流れと定型文しか書いていなかったが、活発な講座にするためにどうすればいいか実際に想像して具体的に細かく書いておくべきだった。健康記録表は、前回席順と受付表の番号がずれたという反省から、数字をなくしたことでズレもなく、なおかつ今回の講座のグループ分けもスムーズにできたので良かった。

3-4-2　講座当日の運営と振り返り：今までの講座運営で私たちが得たのは状況把握力と柔軟性

・資料・運営：当日運営については、主に受付、Zoom、司会の３つの役割があった。まず受付については、予想よりも早く来られて到着を把握できなかった参加者や、事前に申し込みをされていなかった方への対応ができなかった。ただ講座に参加してもらうことが重要なのでそのような参加者の方にも臨機応変に対応できるよう準備しておくことが必要だと感じた。Zoomについては、今回初めてブレイクアウトルームを使うということでZoomの扱いに慣れている参加者の方に運営の協力をお願いしたが、その人と準備段階での情報共有ができておらず当日の対応がかなり大変だったので確認を取るべきであった。Zoomのレコーディングをし忘れてしまったが、それは今までの経験からゼミ生の一人が自身のPCからZoomに入っていたことで気がつくことができたので良かった。ブレイクアウトルームの作り方や携帯での参加方法への確認が甘く当日対応しきれなかったこともあったため、準備の段階で実際の運営をよく予想し確認準備しておくことが重要だと思った。Zoom参加の方への配布資料やアンケートリンクを送信することが遅くなってしまったため事前に用意しておくべきであった。Zoomはその参加のしやすさからこれからのZoomでの参加者が増加すると予想できるがZoomに慣れていない人も多くいる。そのため慣れていない人へのサポートを行うことが大切だと感じた。司会については、講座を始める際、入りが曖昧で参加者の方も戸惑うことがあったように思う。そのために挨拶をするなどまず参加者の注目を集めてから講座を始めることが必要だと感じた。そのためシナリオにもセリフだけではなく、このような注意点を書いておくと良いのではないかと考えた。また、パネリストの方の発表の合間が静かだったので、その間を持たせるために司会は感想や一言を言うことでさらに講座を活発にすることができるのではないかと感じた。質疑応答の時間では、質問は一人がし始めると多くの人がしてくださり活発な質疑応答ができることが分かったので、なかなか質問が出ないときは学生が出すことで活発な講座にしていくことが必要である。質疑応答の際のマイクを渡す役割を決めていなかったがマイクに近い司会が臨機応変に対応できたので良かった。

図3-8　第4回講座の様子

最後に講座後のアンケートにおいては、パネリストの方にも結果を共有するために急いで結果をまとめることになってしまった。アンケートをスムーズにより早く集計できるように工夫が必要だと感じた。

3-4-3　講座終了後の振り返り：目的を意識した行動を

４回目の運営ではこれまでの経験を踏まえて講座開催、運営の反省を通して何が必要で何が必要ではないかの取捨選択もできるようになり、事前準備や当日の臨機応変な対応、講座後の参加や登壇者への対応がスムーズにできるようになったのではないかと思う。例えば、ゼミ生全員がこれらの講座を開く目的として、多くの人に韓国の文化について知ってもらうことを持っていた。そのため申し込みをしていない参加者がきたとしても、断るのではなく当日参加でも対応できるように意識して準備していけるようになった。

今回の講座準備は今までの中で一番情報共有がスムーズにできたため、準備も漏れなくできたのではないかと思う。同時に情報共有の大切さも理解できた。さらに、準備において立候補ではなく、リーダーが全体を見て割り振ることができたため、仕事量に差が出ず各々役割を果たすことができるようになった。また前よりも学生間の関係が親しくなったこともあり、状況把握がしあえて助け合えるようになった。

3-5　講座全体（第1～4回）の振り返り：チーム活動でしか得られない経験と達成感

全４回の講座を通して、参加者に何かプラスになるような発表をすることの大切さと難しさを実感した。主催者にとっても参加者にとっても有意義な時間にするには、調べた事や考えた事についてただ一方的に報告するのではなく、参加者も一緒に考えられるように、画像や動画を利用したり、参加者に質問を投げかけたり、考えてもらう時間を設けたりする必要がある。なかでも第２回講座は企画から当日の運営までゼミ生主体でさせていただいたため、結果として自分たちの成長に大きく繋がったと感じる。先生や研究会からのアドバイスも取り入れ、様々な視点から改善点を見つけ、発表内容を何度も修正したことで、より聞きやすく、話し手と聞き手が双方的なコミュニケーションの取れる講座を作ることができた。

運営面では、平等な役割分担や情報共有・報告の必要性を学んだ。また、発表者や参加者全員に配慮をした、効率の良い運営をするためには活動終了後の振り返り・反省を繰り返し、次に活かすというPDCAのサイクルが非常に重要だと実感した。はじめはゼミ生同士やゼミ生と研究会の間での連絡頻度が少なく、作業の重複やミス、役割分担の偏りがあった。しかし、それぞれの進捗状況や不明な点を共有するように意識してからは、自分だけでなく全体の状況を把握することができ、お互いの作業をより効率化させることができた。様々な視点からの気づきが増え、個人の負担や不安を減らすことにも繋がった。

活動全体を通して、プレゼン力や企画力だけでなく、積極性や協調性、主体性も身につけることができた。チームで一貫した目的を持ち一つの活動に取り組むことは容易ではない。しかし、課題を解決しながら時間をかけて対策を練っていくことで達成することができた。最初は上手くいかない部分もあったが、ゼミ生同士で不明点や不安を共有し合い、仕事を頼んだり引き受けたりして、次第に信頼感が生まれていった。そしてチーム全体の雰囲気もよりよいものになった。初めてのことが多く、手探り状態で苦労したが、全講座を無事に終えた今ではその大変さの中に楽しさも感じ、何より達成感のある活動だったと実感している。次に引き継ぐためには、活動の記録をきちんと残し、学び得たことについて振り返ることが必要であると考える。

４．本活動が持つ意味と意義

以上、活動内容について指導教員が俯瞰したもの、そして現場で当事者として活動に参加した学生の気づきと成長の自覚などが記されてきた。二つのことを踏まえて、ここでは本活動の意味と意義について記しておきたい。アクティブ・ラーニング、と言われても、今一つ明快な像を頭に結びづらいことがある。「主体的・対話的で深い学び」というのが文部科学省の定義づけとして存在する[6]が、それが具体的にどのような形で展開されるのか、そのままでは若干わかりづらい。現代の大学教育ではアクティブ・ラーニングについて、どこでも手探りをしながら行っている[7]というのが現状だろう。CiNiiのサイトで「アクティブ・ラーニング」という言葉を入れて検索すると大量の文献が紹介される。しかも、「アクティブ・ラーニング」は現在学習指導要領に出てくるので、初等・中等教育の実践記録まで含めて大量に文献がある。各大学でも、このような中にあってアクティブ・ラーニングの実践を積み重ねてきていた[8]。PBLを含めたアクティブ・ラーニングは、座学と実際の活動を組み合わせていくことによって、座学で手に入れた知識やこれまで学んできたことを実際に形にする、という効果がある。教育がうまくいけば、それまで学習者自身が教室で学習して手に入れてきたさまざまなもの（場合によっては複数領域にわたるもの）を、実際の場で応用し、なにかを成し遂げていくことができるようになる、という結果が出る。そして、活動した内容について終了後振り返りを行うことで、具体的な部分での反省ができるようになり、次の実践に向けた準備の改善なども図ることができる、という一連のサイクルができあがる。このようなことを繰り返していくことで座学と実践を通じた活動が円滑化し、学習者の知識と関心が深められていくことになるだろう。このことは、「主体的・対話的で深い学び」というアクティブ・ラーニングの定義が形となって現れることになるのだろうと考えられる。

山口県立大学においては、実習を伴う科目はいくつも存在してきた。共通教育科目（現在は基盤教育科目と名称変更）には、「地域共生演習」という科目があった。演習と名前はついているが、実際には地域での活動が組み込まれていた。性格的には初歩的な実習科目としての色彩も有した。現在は「やまぐち未来デザインプロジェクト」という科目が導入されている。また、国際文化学部においては、国際文化学科で「地域

実習」、文化創造学科で「地域文化実習」という名称の実習科目が存在する。これは、各種のプログラム（海外に行くものもある）に参加し、事前学習と事後学習を含めて、実際の活動をしていくというものである。コロナ禍の中にあっても、国際文化学科では、実習科目の一部は、近年の潮流であるDXを教育に導入する試みを伴い行われてきた。

本報告で扱われているプロジェクトは、直接的には実習科目ではなく、必修科目でもある「専門演習」の一環として実行されてきたものである。2021年度には「複言語・複文化」の教育実践ということで行われていた。地域の住民をまきこんだ国際理解活動を言語という部分から扱っていく企画であった。これにも何度か本章の筆者（井竿）は参加したことがある。そしてこの活動の成果は既に報告書として存在している[9]。

今回の場合、筆者は4回の活動すべてに参加した。ただし、一参加者として参加した場合と、コメンテーターとして参加した場合とがある。10月と12月の会には、コメンテーターとして参加した。10月は学生のK-POPに関する調査報告についてのコメント、そして12月には全体の活動を総括した「好きをかたちにする」というコンセプトのもとで話をすることにしていた。

前年度の場合は、さまざまな言語と文化に触れることで、世界の多様性を知ることが前提にあった。今回の場合は「韓国語と韓国文化」に限定して行われたものである。学生はその中で、「韓国映画」、そして「実際に韓国社会で学び、暮らした経験」などの話を聞いたり、K-POPについては、学生自身が調べてプレゼンテーションを行ったりしていた。一つの国に対象を局限したとしても、掘り起こすべき課題は無限にある。そして、そのようなことを知るための活動に地域の人々も参加してもらう、ということで、学生はこの面についても検討を重ねていた。学生は「韓国社会論研究室」に所属しているから、自身は韓国語と韓国社会についてある程度の知識や経験はある。だが、これを「人に伝える」という活動となると、それは容易ではない。毎回異なるゲストやテーマ、そして要求されることがらに応じて、イベントを企画し運営しなければならない。また、参加している人々との世代間ギャップも当然あり得る（特にK-POPなどは若者の文化としての側面が強い）。これらのことを通じて、学生たちは「好きを形にする」、すなわち自分の興味関心ある事柄で何かを成し遂げることの意味を人々に伝えていくことが求められていた。自らが動き（主体的）、自らが他者に働きかけ（対話的）、そして自らの持つものを深めていく（深い学び）、という過程が、これらの活動ではすべてに必要とされた。これが、「アクティブ・ラーニング」の活動において主要な要素をすべて包摂していることになる。「アクティブ・ラーニング」という言葉を前面に掲げず、そのねらいと達成目標を具体的に掲げるということが可能になっているのである。

1　デジタル化及びDXについての解説は、船守美穂「デジタル化とDXの違い」（2020.12.23）がわかりやすい。https://rcos.nii.ac.jp/miho/2020/12/20201223/

2　「連合体で新学部・新学科」『日本経済新聞』2022年12月21日付。

3　アクティブ・ラーニングの定義については、文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集」（2012.8.28）より引用した。https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

　なお、文献によって「アクティブラーニング」「アクティブ・ラーニング」という二つの表記が出てくるが、それらの表記はそのまま用いる。

4　金ゼミでは初回のゼミで専門演習のルーブリックを配布し、ゼミの学習目標を共有する。それから「専門演習Ⅰ」（前期）では文献研究を行い、「専門演習Ⅱ」（後期）では実践研究に取り組む。参考までに、2022年度前期は『本を読む本』（M・J・アドラー著・外山滋比古訳、講談社、1997）をテキストに、先行研究の読み方や卒論の執筆方法について考えながら読み進めた。

5　本活動スタートに至るまでの状況については本稿第２章、または金恵媛「ハイブリッド型コミュニケーションによる複言語・複文化理解活動」（井竿富雄編著『新しい地平へ』、山口県立大学、2022、34-50頁）を参照されたい。

6　筆者が検索すると、「新しい学習指導要領の考え方」という文部科学省の作成したスライドに行き当たった。https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf

7　森川佳世「短期大学におけるアクティブ・ラーニング教育の実例と効果Part３」『埼玉女子短期大学研究紀要』46号、2022年、「特集CUCのアクティブ・ラーニング」『CUC View&Vision』（千葉商科大学）54号、2022年などが出てきた。後者においては、実習系科目だけでなく、哲学・倫理学のような科目でもアクティブ・ラーニングの方法論を実行し（そして失敗もし）ていることが記されている。

8　アクティブラーニング、という言葉で検索すると、多数の本が出てくる。新しいものでは、東京大学教養学部教育高度化機構アクティブラーニング部門編『東京大学のアクティブラーニング』東京大学出版会、2021年。

9　前掲の金（2022）。これは、ヤマグチイーブックス（https://www.yamaguchi-ebooks.jp/）で読むことが可能である。

＊謝辞：「Enjoy!!あなたの知らない世界 with YPU」（2021、2022）は山口県国際交流協会の助成を得て実施しました。ここに記して謝意を申し上げます。